

ボランティア参加記録

平成 23 年 8 月 5 日

重井医学研究所附属病院 小児療育センター

言語聴覚士 坂本 有理

●はじめに

平成 23 年 7 月 30 日～8 月 2 日まで、震災後の子ども達のこころのケアを目的とした「みどりの東北元気キャンプ」に参加しました。小川先生と吉岡先生から参加を勧めていただき、被災地の子ども達に安心して活動できる場所を提供すること、震災後の心のケアを行うこと、また心理士や教員など、さまざまな職種の方と連携を取りながら、子どもや保護者への関わり方を学ぶことを目的に参加しました。

キャンプは福島県の小野川湖にあるキャンプ場で行われました。郡山市内を始め、キャンプ地周辺では震災による目立った被害はなく、表面上は普通の町に見えました。しかし、保護者の方によると市内の本屋さんには原発・放射能に関する本が平積みされるなど、今も特設のコーナーが設けられており、ものものしい雰囲気が続いているそうです。また、駅で見たニュースには常にテロップでその地域の放射線が「市役所前〇〇シーベルト 公園〇〇シーベルト」と表示されていました。



小野川湖は福島県北塩原村にある湖です。福島市からは約 30km 離れており、夏はカヌー、冬はわかさぎ氷上釣りの名所にもなっています。東京からは東北新幹線で郡山まで約 90 分、そこから磐梯西線に乗り換えて約 40 分(電車は 1 時間に 1 本あるかないか...)さらに車で 40 分ほどの場所にあります。

●日記

7月 29 日

新幹線で深夜に品川に到着し1泊。この時点で福島県内は大雨洪水警報と土砂災害注意報が出ていました。増水した川の映像を見て不安になるも、キャンプ地周辺では天気が徐々に回復していると聞いて一安心、そのまま就寝しました。

7月 30 日

朝7時半にホテルを出て、東京で東北新幹線に乗り換えました。郡山で磐越西線に乗り換え、猪苗代駅を目指します。猪苗代駅までは電車が出ていましたが、もう少し先の地域では大雨による運行停止となっていました。そこからさらにキャンプ地まで午前中2本しかないバスへ乗車。バスに乗り遅れた人はタクシーを駆でひろったそうですが、キャンプ地の住所を言っても「そんな場所はない」と地元の運転手さんも困惑。携帯も圏外でキャンプ地にいる人とも連絡が取れない為、地図を見ながら最後は徒歩でなんとか到着！という人もいました。今回は前日の大雨警報の為、10名ほどキャンセルが出て、子ども約60名、保護者4名の参加となりました。その他に医療スタッフを始め、教員や心理の先生方、そしてアウトドアの専門家など、北は北海道、南は福岡まで全国からスタッフが集まりました。その中で、私は4日間子どもたちと同じテントで寝泊りしながら子ども達の活動をサポートする役割のスタッフとなりました。



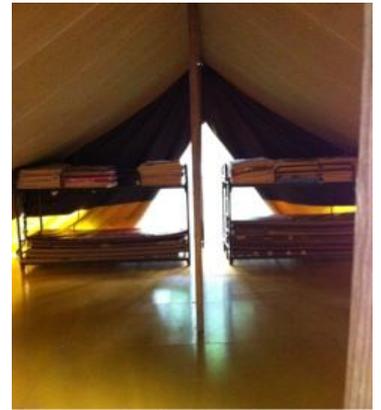
スタッフ手作り看板



**ダイニング小屋に大人も子どももぎゅうぎゅう詰めとなって、開会のあいさつと歌。
立ち歩きが目立つ子どもが、ボンゴの演奏で参加する場面も。**

開会の挨拶から土砂降りの雨となり、活動は雨プログラムに急遽変更。屋根のある場所でギター演奏が始まり、歌の時間となる。元気よく歌う子、下を向いて恥ずかしそうにする子、周囲が気になって落ち着かない子、椅子に座れずに歩きまわる子など反応は様々でした。

夜には街作りについての講演を聞き、子どもたちが自分たちの街の復興の為のアイデアを考える時間になっていました。また、心理の先生方によるリラックス法についての説明があり、子ども達はもちろん保護者の方が真剣な表情で参加。「なんか、パタパタすると落ち着くね」と近くの子も顔を見合わせて笑っていました。



4日間、このテントで子ども7人、大人4人が隙間なくマットを敷き詰めて寝泊り。マットと寝袋に毛布3枚使用しても朝と夜の冷え込みは厳しい状況でした。

就寝時間になると疲れてすぐに寝る子もありますが、半数以上はもぞもぞと動いたりトイレに立ったりと落ち着かない状況。すぐ隣に寝ているため、息遣いまではっきりと聞こえてきます。狭い空間に大勢が寄せ集まって寝ており、避難所はこんな感じだろうかと思惟しました。身体は疲れていても熟睡はとてできません。

7月31日

深夜3時半頃、震度3～4強、マグニチュード6.4の地震あり。飛び起きると同時に「パニックになった子はいないか」と周囲を見渡しますが、私の寝ていたテントでは大人も含め全員爆睡。朝になっても地震に気づいた子どもはいなかったようで、一安心。その一方、福島子ども達にとってはこのぐらいの揺れにはもう慣れっこになっている子どもも多いのか・・・と複雑な心境になりました。

この日はカヌー・カヤックの体験活動や、子ども達が与えられた食材を使って火おこしから調理までを行うビストロパーティーが開催されました。まるまる一匹の鶏、60センチはあるスズキなどの珍品も多く見られました。火おこしに苦戦しているチームも多かったようです。



何が出るかは開けてみてのお楽しみ。中には、子どもの顔よりも大きなダチョウの卵も。普通の方法では重過ぎてわれず、子ども達はお玉をかなづち代わりにガンガンと叩きつけて割っていました。

箱の中身は班によってバラバラ。私がついていた班では見事ダチョウの卵を引き当て、その卵でキッシュ（という名のお好み焼き？）を作っていました。火おこしどころか、包丁さえ握ったことのない子も大勢いて、怪我がないか大人は冷や冷やです。包丁を持った子どもの横や、火の横でも全速力で前しか見ずに走り抜けていくなど、注意が散漫になりやすい子もいた為、周囲のスタッフと声を掛け合いながら活動を見守りました。

8月1日

この日は朝から天候にも恵まれ、子ども達はそれぞれ昨日体験した活動の中からやりたい活動を決めて参加します。



**20m(5階建相当)のツリークライミング
ロープ1本で登ります。**



大人も子ども以上に楽しんでいたツリーハウス作り



**いかだ作り
何回も修理して
やっと完成！**



シャワークライミング 大雨で水かさはいつもの3倍 専門家とスタッフが後ろからフォローして安全を確認しながら実施。小学生の低学年も全員ゴールまで登りきりました。

8月2日

この日は、みどりの東北街づくり計画の発表日。子どもたちはそれぞれ「自分達の街にこんなものがあったらいいな」というものを画用紙に表現していきます。土を拾ってきて貼り付ける子、葉っぱを建物の周り一面にはって緑のカーテンにする子、手や足に絵の具をつけて大胆にスタンプにする子もいました。風力発電のプロペラが屋根につき、どこにでも移動できるアイスクリーム屋さん、迷路みたいな巨大なカフェ、震度10でも壊れない福島県の『東北ツリータワー』、雷と地震発電の100階建てコンビニなど、子どもならではの発想に驚かされました。



「学校の図工じゃないから、好きになんでもやってみよう」絵の苦手な子にはスタッフがさり気なく粘土や折り紙なども示して、思い思いの方法で作っていきます。



作った絵は、子ども達の新しい街として木の道路で作られた「みどりの街」に並べていきます。
(下がブルーシートなのが個人的には少し残念でしたが。)最後に葉っぱの顔縁を置いて、完成。



開会式でのスタッフの紹介の様子です。この後、マイクロバスまで大人がアーチを作って子どもたちを見送りました。泣き出してしまう子も多く、名残惜しい気持ちの中、最後は涙のお別れとなりました。

●まとめ

スタッフは準備や子どものフォロー、ミーティングと多忙。睡眠時間を十分に確保することが難しい毎日でしたが、キャンプ中に「こんなに笑ったの、いつぶりかなー?」「来てよかった」と何人もの子ども達が言ってくれているのを聞いたことが何よりの励みになりました。

子ども達は、4日間そばで関わっているといろいろな行動や話をしてくれます。部屋に敷き詰めたマットを崩して遊ぶ津波遊びもその1つでした。また、夜の寒さに震えている子に近づくと「俺の友だちな、こんな風に寒くて震えてると、それをまた地震が起こったと勘違いして大泣きするんよ」「今年はずっと部屋にいるばかりで、外で遊ぶのがすごい久しぶり。」「学校も家も、窓を閉めたままで暑くて辛い。」競うように話しかけてくる子ども達の話の話を聞いていると、笑顔の裏に隠れた今回の震災の被害を改めて思い知らされました。TVでの報道が減ってくると、離れた地域にいる人ほど災害の記憶は薄れていってしまいます。しかし、街も人も、本当に復興していくのはまだまだこれからだと感じました。

また、言語聴覚士として参加したことで、個別の支援を必要とする子ども達への対応に戸惑う場面は少なかったように感じます。参加者の中には、日ごろ療育センターに通っておられる子ども達同様、発達障害を抱えた子ども達もいます。診断名がはっきりとついている子以外にも多動が目立つ子や、注意散漫な子など、集団の中に行動が気になる子ども達が数名いました。心理の先生を始めとしたスタッフがさりげなく近くについてフォローしていますが、水辺の活動や調理場面など特に危険を伴う活動では、スタッフが連携を取りながらその子に合わせた関わりを行う事が求められました。また、行動は落ち着いて見えてもアニメの話しかしない子、相手の返事を聞かずに一方的に話し続ける子、「疲れて寝ている子もいるから、お話は小声でしてね」と頼んでも「私はまだ眠くない。なのにどうして静かにしないといけないの?」と主張する子。そしてその子たち本人の対応だけでなく、「びっくりした!」「あの子、どうしてあんな事するの?」ととまどう周囲の子たちに説明が必要な場面もありました。Ⅱ期のキャンプでも療育センターから言語聴覚士が1名参加予定ですが、今回以上に日々の業務を活かした活動を行えるよう、引継ぎを十分行う必要があると感じました。

以上で報告を終わります。お忙しい中、出張に行かせていただき本当にありがとうございました。